『主イエスを愛することで…』ヨハネ14:15-24

14:15 もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。
14:16 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。
14:17 それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。
14:18 わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。
14:19 もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。
14:20 その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。
14:21 わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」。

●序論

新型コロナ感染禍でしばしば話題になったソーシャルディスタンス。あちらこちらで多くの孤独が生まれました。

それまで当たり前すぎて、わかっていなかった。一緒にいることの祝福。それが当たり前でなくなっってしまったとき、そばにいてくれる友や家族が、どれほど大切な存在か思い知らされたのではないでしょうか。

介護施設や病院で面会、顔を見ることさえできず、最も精神的なサポートが必要な時に、そばにいられない、いてもらえない…。そんな「距離」というものがあった…

わたしは、「愛する人と一緒にいる」ということがどれほど人を支えていて、大切なことかと思わずにはいられません。

それがまさに「愛するということ、愛し合うということ」なのです。

今日お読みした聖書の一節にこうあります。

（LB)：18わたしはあなたがたを見捨てたり、孤児のように置き去りにしたりすることなどありません。

この言葉を聞くことができることは幸いです。この言葉を経験することが大切です。

それが教会の歩み、礼拝の歩み、信仰生活です。

そんなことも心に留めつつ今日、「主イエスを愛することで…」と題して御言葉に、共に耳を傾けていきましょう。

●本論

Ⅰ．愛するという応答

（新改訳）14:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわた

しの戒めを守るはずです。
長い夫婦生活を歩む夫婦が「お互いを空気のような存在」と表現するのを聞くことがあります。「空気のように大切、でも普段あまり意識しなくてもそばにある存在」
しかし実際には、病や悩みの中、無理やり距離をとらなければならない時、初めて一緒にいることが当たり前ではない大切なものだと気づかされることがあります。
「愛すること」は、当たり前ではない、愛する人がそばにいることは当たり前ではない、その時間を大切にしなければならないことなのです。

イエスさまが一緒にいることが当たり前であった弟子たちにとって、13章以降、イエスさまの言動が、ある意味緊張感を生み出していました。
13:33 子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。
そんな中、イエスさまは繰り返し「わたしを愛する」ことについて語っています。

聖書の福音は、神の御子イエスさまを通して、神さまご自身との大切な関係を回復するということにあります。
神さまはわたしを愛してくださっていると心から言うことができる。そして、その愛を受け取っているからこそ、「わたしはイエスさまを心から愛したい、いや愛します！…」と言える、そういう関係に入れていただくことです。
実に、愛されていることの当たり前が、どれほど大切なことか気づいて、そこで感動があふれ、「わたしはイエスさまを愛します」と言える者とされるのです。

ルカによる福音書15章の放蕩息子のたとえで、父の愛と真実を思い起こさていただく祝福を、わたしも皆さんも経験したのではないでしょうか。
その感動から聞く父の言葉は、もはやかつて感じていたような、窮屈で邪魔な言葉ではなく、むしろわわたしにとって大切な祝福を込めた言葉だとわかるようになってくる…。
こういう経験を経て、私たちは聞くことができるのです。
14:21 わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」。
イエスさまに感動し、イエスさまを愛し、御言葉を愛すればするほど、イエスさまがわかってきて、さらに喜びと感動が押し迫ります。それが信仰生活の祝福なのです。

Ⅱ．聖霊を知るという祝福
14:16 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。
「助け主」聖霊なる神さまは、気まぐれにわたしたちのもとに来られたのではなく、イエスさまが願い、遣わされたお方です。　そしてこう言われています。

14:17 それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

「この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。」とあるような表現が、今日お読みした個所では繰り返されます。

14:19 もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

わたしは、牧師の息子ですが、以前は「信じない者」でした。まさに「この世」に属するようなものでした。けれども神さまの恵みで、神さまのもとに帰って救われてからは、ずっとイエスさまに目を向けて生きることがうれしい…というような者になれたのです。

不思議な体験です。けれども、それがわたしの救いの経験の事実です。

ですから、「この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない」ということがわかりますし、「あなたがたはそれを知っている」という経験もしています。

そしてイエスさまは、そこで「なぜなら」と続けています。

:17…なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

:19…なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

おわかりになるように、ポイントは、聖霊なる神さまが、助け主として、弁護者として、わたしたちを守る方として、わたしたちの内に、共ににいてくださるからです。

はっきり申し上げます。これは「神秘的な経験」であり祝福です。

人が、人の力で持つことのできる経験ではなく、イエスさまを信じ、愛することで受ける、神さまからの祝福であるということを覚えていてください。

Ⅲ．孤独とされない安心

イエスさまは、これから弟子たちが経験する困難、迫害と苦しみを知っておられました。その先にある彼らの苦悩を知って…痛まれたことでしょう。だからこそここで、そんな彼らを励ましているのです。

14:18 わたしはあなたがたを捨てて孤児（みなしご）とはしない。あなたがたのところに帰って来る。

そこではこう続くのです。

14:19-20 もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。

確かにイエスさまのことは、十字架、復活そして天に帰られることで、人々の目には見えなくなります。けれども、あのペンテコステの経験を通して、聖霊によってわたしたちの内に、”イエスの霊が生きる、そして私も生きる”という経験を得いていくのです。
　これが、先ほどもお話しした「神秘的な経験」であり、人の経験を超える、神さま由来の祝福なのです。
　だからこそ、「この世は見ない。しかしあなたがたはわたしを見る」という経験なのです。　それこそ、また「あなたがたを捨てて孤児とはしない」。あなたがたともにいるよ！という、神秘的でいて、とても豊かな祝福の経験なのです。
決して孤独に置かれない経験を、孤独に見えるような状況でも知ることができる。
　　14:23 イエスは彼に答えて言われた、「もしだれでもわたしを愛するならば、…そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。

●おわりに
一人の先生のCBC1年生の時の経験。ある賛美集会の応援派遣。教会の前の道で、教会案内のチラシを普通に配っていたその時、前から歩いてきた一人の男性に、肩のところをゴツッと殴られたのだそうです。
　何が起こったかわからない、とにかくショックを受けたそうです。
　しかし、そんな経験を経てこの先生は気づかされたそうです。
　わたしがこれから遣わされていていく「この世」というのはこういうところなのだと。
　こういう世でイエスさまはあの十字架を負われたこと、そして私もその歩みについていくのだと、しっかり打ち込まれるような経験をされたとお話しくださいました。
そして、聖歌723を紹介してくださいました。
　　暗き谷間を　　たどる時も
　　明るき道を　進む時も　　わが心は　常に楽し
　　きみは常にましませば（※いっしょにいてくださる）

　わたしたちもこの世に遣わされている神の子です。問題や障害、悩みや恐れを経験することがあります。
　そんなわたしたちを思って、イエスさまは、聖霊を遣わしてくださいました。
　慰め、癒し、また励まし、生きる力をくださるためです。

そうして忘れてはならないこと、それはイエスさまに愛されていること。そしてを愛することです。そこで「神秘的な祝福と平安が」わたしたちを満たし覆うことでしょう。